とあるあわれな召使いのお話

ももはる雪

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
とあるあわれな召使いのお話

【Ｎコード】
Ｎ１３７０ＢＡ

【作者名】
ももはる雪

【あらすじ】
月が冴え冴えと輝く夜。友人の見習い兵士の身代わりとして城の警備にあたっていた、庭師のアガサ。その上にすす汚れた少女が落ちてきた。
以前サイトで公開していたものを改稿しました。

1．銀月の姫君

その夜。
晒した肌がびりりと痛むほど澄みすぎた空気が、黒い空から月と星だけを克明にしていた夜。
アガサは友人の見習い兵士に頼まれて、とある城の警備についていた。
ふわっと身体の底から溢れてくる眠気を口元で押さえ、高い城壁を下から上まで眺めた。
いったいこの城壁を越えて、誰が侵入してくるというんだろうか。
今、城内には特別警戒令なるものがしかれている。
そのせいで、非番だったはずの見習い兵士まで緊急に駆り出されるハメになって、今、アガサがここにこうしているわけである。
今ごろ友人は、じっくりと恋人との逢瀬を楽しんでいるはずだった。

まぁ謝礼金ははずむと言っていたし、その点について文句を言うつもりはアガサにはなかった。
この間の賭けに負けた分もチャラにしてくれると言っていたし。
常にお金が欠乏している身としては、臨時の収入はありがたいものだ。

城壁にぶち当たったので、元の道を引き返すことにした。
振り分けられた警備区間は、さすがは見習い兵士というべきもので、城壁が一番高くそびえ立ち、高貴な身分の方々が住む本城区画からは一番遠い。
城が抱えている、様々な職種の召使いたちが住む居住区だった。
アガサの家もこの中にある。
家、と呼ぶにはそれこそ高貴な方々の高い鼻で笑われてしまいそ

うな、お粗末なものではあったが。
それでも何よりも、一から十まで自分の手で得ることができた家なので、アガサにとっては十分に満足のいく小さな城なのである。

今は、見習い兵士の制服に身を包み腰には剣を下げてはいるものの、アガサの本来の身分は、庭師だ。
庭の景観を整えるのがもっぱらの仕事だ。夜は寝て、昼に活動する。
もちろん、夜の間に咲く花も、日が昇らないうちに手入れを終えなければいけないわがままな木も多数、あるが、とりあえず今の時期において、アガサの担当する庭で夜に気にかけなければいけないものは一つしかない。
他は下準備の段階だ。だからこんな、見習い兵士の身代わりの仕事なんてものも引き受けられるわけで、けっしていつも暇なわけではない。

アガサは、友人の先輩兵士に指定された道順から一歩もはみ出すことなく歩いていた。
十往復、を越えたところだったろうか。ふと不良心がわいて、アガサは本城へとくるりと向きを変えた。
壁ぎわにまでたどり着き、窓の向こうは厨房だったはずと中を覗きこんで確認する。
常にいい匂いを漂わせてくるそこも、とっくに火が消えて冷たくなっていた。
下働きの、しかも庭で仕事をしているアガサにとって、本城の中の様子はさっぱり想像の及ばない場所だ。
けれど、一歩外に出た庭のことなら想像できないことは一つもなかった。

厨房の周りの壁に手をつくようにして、裏側に回り込む。

建物と建物の狭い隙間、例え夜でなくとも光の差しこみそうにない、湿った場所があった。三方の壁にはびっしりとコケが生えている。
人目につかないことから、以前は主に、厨房の一時的なごみ捨て場として利用されていた場所だ。
料理のときに使った生ごみが、かなり無造作な状態で捨てられていたりした。
今は、アガサが頼み込んで、別の場所に捨てるようにしてもらったのだが。
アガサはその場にしゃがみこんで、土をわずかに摘み上げ、ぺろりと舐めた。

「うん、おいしい」

いい感じに育っている。
アガサは満足げに笑って、その場に座りこんだ。
コケの壁を背にして、しばしのおさぼりを決行した。

特別警戒令がしかれている夜にしては、あまりに静かで穏やかだった。
何かが起こる前には必ず兆しがあるなんて考えるのは、平和ぼけの極まった感覚なのかもしれない。
でも、多少の寒さを除けば、家の中にいるときと何一つ変わらない夜に思えた。

庭師とは、自然相手の職業であるため、天災に関しては、アガサはかなり敏感だった。
大規模なものでなくても、ささやかな雨や風の匂いまで嗅ぎ分けられる。
ただ対象が人災になると途端、鼻の穴がつまってしまうようで。

そういう意味で、アガサはかなり、警備兵という任務に適していないと言えた。

建物に挟まれた、狭い空の中でも、月と星はきちんと配置されていた。

アガサはしばし寒さも忘れて、その光に魅入った。

（――――　銀月の姫君がさ、）

ぼんやりと、今朝、友人がこの頼みごとを持ちこんだときのことを思い出していた。

「銀月の姫君が結婚するらしいよ」

庭師と見習い兵士を比べてみると、給料は似たようなものだが、身分の壁はある。

そんなことを気にするふうもなく、友人は今朝もアガサの家の戸を叩いた。

そして、アガサの入れたハーブティを口にしながら、にやりと笑って言ったのだ。

アガサがすっかり忘れていた賭けのことを。

銀月の姫君。

この国の、第一王女の容姿を称えた呼び名。

愛しい恋人の存在も忘れたように、友人の語りは熱っぽさを帯びる。

なんでも、月の雫で染めたかのような銀糸の髪、同色の瞳、雪が

溶けこんだ白い肌の持ち主なんだそうだ。
今年、姫が十五を迎え、成人した祝いの儀式の一環として、大衆の前に姿を現したことがあった。そのときの豆粒のようなものしか、アガサの記憶の中にはない。
同じ城の中に住んでいるのに、一度たりとも会ったことはない。
こんなに近くにいるのに、月のように遠い人。
アガサにとっては、だからの、銀月の姫君だった。

目下、成人を迎えた姫の婚礼の話は、国の最大の関心事と言えた。
結婚相手は誰か。
大臣の息子だとか、隣国の王子だとか、色々な候補が憶測として上げられていて、それに便乗して賭け、をしたのだ。
なんでそのことを覚えていないかと言えば、まったく飲めない酒をたらふく胃に流しこんだあとに、賭けをしたせいだと推測される。

「銀月の姫君は誰とも結婚なんてしない」

妙に確信をこめて、アガサは言い切ったらしい。

本人としてはまったく記憶にないのが、それにしたってどうしてあんな大金を、姫が結婚しないほうに賭けてしまったのか。
アガサはそのときのアガサに首をひねってしまう。
まあ、それも今夜を過ぎればどうでもいいことだけれど。
友人は、この身代わりを引き受けてくれれば、賭けの負けはチャラにすると約束してくれた。
何も心配することはない。
そう、例えば、厳戒態勢に引っ掛からずに忍びこめるような、とんでもない輩でも出ないかぎりは大丈夫。
アガサはその夜まで、自分の下にある揺るぎのない大地や、自分の上でいつも輝く星や月を信じて生きていた。

目に映っていた月がゆらり、と横揺れした。
風が吹いたとしても、月は揺れない。第一、音も立てずに天候は変化しない。
アガサは当たり前のことを確認してから目をこすった。すると今度は、一秒前まであったはずの月が消えた。
吹き飛ばされるはずはない。第一、……
アガサはきょろきょろと空を見回して、月を探した。

銀色の光を揺らして、もう一度、狭い、黒い空の中にぽっかりと月が現れた。
そして、もっと違うものも現れた。
一瞬、月が長く細く伸びたようにも見えた。

「は？」

アガサの呟きは、夜の澄みすぎた空気の中にあって、よく響いた。
ふわりと、音を立てて飛び立ったそれは、見る見るとその形を大きくした。
ぽかんと口を開けて、その数秒後を思い浮べてみる。
湿っぽい、今もまだ生ゴミの匂いが抜けていない土地が見えた。
それに気付いた途端、おそらく、アガサは今までの人生の中で一番素早く身体を動かした。

どすん。

危うく、腕の中に落ちてきたそれごと、地面にひっくり返るところだった。
アガサはかかとと腹筋に力をいれ、なんとか体勢を維持する。
最初の衝撃ほど、それが重たくなかったことが幸いした。

というか、それがいったい何であるのかわからなくなるほどに軽かった。
アガサは、それを少し離れた場所に立たせて置いて、先ほど自分がつけてしまった足跡を、しゃがみこんでしげしげと観察した。
無事であることを確認し、ふうと息を吐き出す。
どうやら、当初の予想ほど荒らさずにすんだようだ。これなら少し手を入れてやれば大丈夫。
やれやれ、とアガサは頭を掻いた。

「……　あの」

澄んだ大気の中にあって、さらに澄む。
ときどき城の方から漏れてくる、なんとかという楽器の音色を思い出させた。
高く、遠く、優しく、甘い。
アガサは振り返り、月の光を頼りにそれを見た。
薄い、肌の色を透かしそうな薄布でできた衣装を着ている。おそらく寝間着、だろう。
高価なものだろうし、よく似合っていて、何よりも魅惑的だが。
外の空気に触れるには決して適していないし、しかも所々が破けていた。
そしてよく見てみれば、服も、足も手も顔も、全身が黒くすす汚れている。
アガサは慌てて近寄り、ポケットを探ったが何も見つからない。
仕方なく袖口で、頬に触れた。
びくり、という震えが伝わってきた。

「あー、できれば動かないでください、ね？」

頬の汚れをぬぐう。

黒いすすをどけると、噂どおりの、雪が溶けこんだような白い肌が現れる。
顔全体を一通り拭き終えると、ぎゅっと閉じられていた目が、ゆっくりと開かれた。

どんなに汚れたとしても、髪と目の色をごまかすことはできない。
確か、月の雫で染めたような銀糸の髪と、同色の瞳、だっけ？
アガサはしばらくそれに見惚れたあと、彼女が小刻みに震えていることに気がついた。

「あー、すみません。気が利かなくて」

アガサは羽織っていた見習い兵士の上着を脱いで、彼女の細い双肩へとかけた。
友人からの借り物だったが、まあこの際仕方がないだろう。
彼女はきょとんとして、アガサを見つめていた。
今夜の月のような、真っ直ぐな銀色の光を持つ瞳で。

アガサはその場に片膝をついて、深く頭を垂れた。
慣れないせいか、カチャと腰に帯びた剣が地面にぶつかって間抜けな音を立ててしまった。が、まあこの際仕方がないだろう。

「……　あの」

ためらいがちな、困惑に満ちた声を、許しの印と受け取って、アガサは顔を上げる。
月の光が眩しい。アガサは目を細めた。
元ごみ捨て場、という場所にはじめて光が差しこんだ瞬間だ。

「あの、数々の非礼なふるまいをお許しください。あなたはいった

い？」
「はい。私は庭師です」
「庭師……？」
彼女は肩にかかった上着を見て、細い首をかしげた。
それは友人のものなんですよ。と、アガサは説明した。
「ああ、……ごめんなさい。私のせいで汚れてしまいましたね」
「平気ですよ。友人はあなたのファンですから。よかったら使ってやってください」
アガサがにっこりと笑うのとは対照的に、彼女の顔がゆがむ。
冷ややかに、美しく、月に似る。
「ところで銀月の姫君、今宵はどちらまでお出かけですか？」

2．冬の庭師

一国の王の住まう城ともなれば、庭園もまた相応に広い。
国の領地は大きければ大きいほど豊かさを示す。その縮小版が城だとも考えられるのかもしれない。
だから、とても広い。この国の城の場合、無駄に広いとも言える。
一人の庭師で、その全体を管理するのは不可能だ。

「私が担当しているのは、冬の庭だけですよ」
「冬の庭？」

じめじめとした土の腐臭の中にあるには不釣合いな声音に、アガサは手元から少し顔を上げた。
何年履いているかもはや定かではない、ぼろぼろの極みに達した靴。
アガサの足の大きさは標準だと思うが、それより一回り以上は小さい。
細くて白い足が、そのぼろぼろの靴から伸びている。
姫、と呼ばれるような人にそれをさせるのはかなり気が引けたが、アガサにはそれ以上のものを与える余裕がなかったのだ。

銀月の姫君は、ぼろぼろでぶかぶかの靴にも男臭いだろう上着にも不満の代わりに感謝を表し、微笑んだ。
おそらく、姫は言葉と表情を選び間違えたのだろう。
そしてなぜか今は、アガサの隣にしゃがんで、見習い兵士（身代わり）の仕事のさぼりっぷりを観察している。
奇妙に思いながら、アガサはとりあえず全部を後回しにして、庭師としての本来の仕事を優先させていた。

「このお城の庭は、四つに分けられているんです。春、夏、秋、冬という名前で。それぞれに専任の庭師がいて、私が担当するのが、ここらへん一帯の、滅多に誰もいらっしゃらない、冬の庭、なんです」

姫はその言葉を受けて、きょろきょろと辺りを見渡した。
本当に見事に何もない状態なので、アガサは少し、居心地の悪さを感じた。
姫には詳しく話さないが、いらっしゃらない、とは主に、姫のような高貴な身分の方たちのことを指していた。
庭師にもランク、というものが存在する。
冬の名前は、最下のランクに当たる。だからアガサのような若くて未熟な庭師にも任される、というわけで。
おそらく姫が一番目にすることの多い庭は、春という名前で、すこぶる腕のいい熟練庭師のもとで咲いている庭だ。
豪華で優美で、生き物を寄せ付けずにはいられない。
濃厚な匂いを放ち、世界中の色を凝縮し、まるで夢の中を彷徨っているかのような錯覚を与える庭。

それと比べれば、ここの庭はわざと人の目に触れないように造られていると見えなくもないかもしれない。
まるでお前の人間嫌いをそのまま反映しているような庭だな。
と、友人の見習い兵士にまで指摘されるような有様の庭だ。

「あの、それであなたは先ほどから何をなさっているのですか？」

アガサはやはり作業しながら会話をするのは失礼だったかと思い、手を止めた。
すると逆に、そのままやり続けていただいて構いません、と許しを受けた。

「ええと、ここの土は栄養をよく含んでいていい土なので、肥料にしようかと思いまして。育てている最中なんですよ」
「育てるんですか？　土を？」
「はい、まあ勝手に育つものなんですけどね」

冬の庭に振り分けられる予算は少ない。だから、市場で出回っているような土なんて贅沢で使えない。
アガサ自身、冬の庭、という名前を特別意識したことはない。
でも実際、この庭には、冬の凍てついた空気を好む植物がたくさん育っている。たくましい力強さが、気に入っているから。
そして並行して、傷によく効く薬草や、腹痛を抑える実をならす木など、国で一番安全な城の中でなんの役に立つのか、と思われるものも育っている。
召使いたちの間ではとても重宝がられ、貴重な収入源にもなっているのだ。
ただその分だけ、どの庭よりも色や香りがいまいち地味になるのは事実だ。
だから一見殺風景なのだが、あの木もこの草も花も、アガサが手塩にかけて育てたものだ。
けして、本職までさぼっているわけではないのだ。
なんてことはもちろん全部、姫に対して一言たりとも言えるわけがなかった。

姫の視線の先が、自分の手にあることをアガサはよく意識していた。
もう怖気が芽生えて直視なんてとてもできないが、あの月のような静かな瞳を、意識せずにはいられなかった。
そんな下心がばれたのか、すっと闇夜を切り裂くように白い手が伸びてきて、アガサの手に重なった。

「姫？　汚れますよ」

おそらく、この国の中で、もしかしたらこの世の中で、一番美しい手。アガサはこんな美しいものを見たことがなかった。

それを汚す、ということがどれほどの罪なのか。

アガサは自分の身を案じてやんわりと手をどけようとした。

姫はひるまずに、ぎゅっと手にさらに力を込めてくる。アガサはその冷たさに目をみはった。

夜の空気に触れるには、あまりに弱いものだと感じた。

アガサはしばし考え、結局、両手を上げて降参した。

借り物のズボンで手をぬぐい、両手で、白くて美しい手を包み込むように握った。

幸い、先ほどまで動き続けていた分だけ、手のひらの温度は高いはずだ。

できれば、熱と誠意だけが姫に伝わりますように。

アガサは手元に顔を近づけ、そっと息を吹きかけた。雪のような手がびくり、と震える。

二度三度と繰り返しても、不敬罪は宣告されなかったので、そのまま続ける。

もし。

もしこのまま、物語に出てくる騎士のように、白く美しい手の甲に口付けをしたとしたら？

そんな誘惑が、アガサの背中をなでた。

それほど、姫はおとなしく、従順だった。

「そういえば、ご結婚おめでとうございます」

色々なことを言う順番がめちゃくちゃだ、と我ながら思う。
もともと社交性のある方ではないし、友人に言わせると人間嫌いの典型らしいので、仕方がないのだが。
それでもせっかく近づいた距離が、また月ほどに遠くなってしまったのは事実だった。
アガサは自分自身にため息をついたが、まぁこれは夢か、何かそれに近いものだろうし。
潔く諦めて、覚めるのも簡単だ、と思った。

「明日、婚約の儀があるの」

甘い声がもう一度夢の世界へと誘う。
アガサは悟られぬように、そうですかとそっけなく答えた。

「お相手は、どなたなんでしたっけ？」
「ハイバムータの、ムラサキ王子」

と言えば、お隣の国の、若いのに大層優秀で、しかも美しさを兼ね揃えるという評判の王子だったような。
民の間では、この国の、これまた大変優秀だという噂の第一王子と並べて称えられる。
またこの二人は仲のよい友人同士でもある、ということで。
二国の未来は約束されたようなものだ。
妹姫であるこの方が嫁ぐとなれば、その絆はより確かなものとなるだろう。隣国はこの国よりもさらに大きく豊かな国だ。
さぞかし城の庭も立派なものだろうなぁ。
アガサが想像して呆けている間に、月には雲がかかり、姫の顔はますますかげった。
なぜか。
ただの庭師であるアガサにそれがわかるはずもなかった。

「お嫌、なんですか？」
「いいえ。光栄に、思っています」
姫もそれを承知しているのだろう。詳しくは語ろうとしない。
ただ、と口にした。
ただ、この夜、月が空から舞い降りて、土にまみれた庭師に出会った。
その偶然を、姫はとても大切なものであるかのように語った。
「例えば私は、この城の中のことならば多くを知っています。でも一歩外に出れば、私にとっては未知のものばかりで、まるで夢の世界にいるのと同じなのです」
それは自分とは逆の見解だなとアガサは言葉にせずに思う。
「うまくは言える自信がありません。ただそれは嫌だったのです。そんなことではいけないと感じました。自国のことさえ何一つ知らない私が、異国で何をすればいいのでしょうか」
きっと、異国でも城の中にいて、雪や月や花のように笑っていることを望まれるのだろう。
銀月の姫君として。
「だから今夜、外に出てみました」
いつのまにか、アガサの一番最初の問いかけに姫は答えようとしていた。
「どこに行こうなんてちっとも考えていなかった。一歩、外に出る

ことが目的だったから」

そのために、どうやって寝室を抜け出し、多数の召使いの目を盗み、本城の隅の隅、この厨房の屋根にまでたどり着いたのか。

全身についた黒いすすの正体を、姫は誇らしげに語った。

「――　なるほど」

アガサはぽんと一つ手を打って、ではそろそろ仕事に戻らないと、と姫に向かって告げた。

姫は美しいままで、何の変化も見せなかったが、そうね、と呟いた横顔は淋しげだった。

そろそろ月は、元の位置に戻らなくてはね。

「姫、俺は庭師なんです」

離れていきそうになった手を取る。

姫は小首をかしげ、それは先ほど聞きました、という顔をした。

「だから……、こんな恰好をしてますが、あなたを城に連れ戻す命令は受けていません」

それを受けたのは友人の見習い兵士であって、今ごろは最愛の彼女のもとにいるはずだ。

姫は固まり、驚いた様子で目の前の庭師を見ている。

いつのまにか人称を変化させ、にっこりと微笑む冬の庭師を。

「俺の庭へようこそ、銀月の姫君」

＊　＊　＊

凍りつきそうなほど寒い夜であり、何よりも今の時期は手入れの準備段階であり、何よりも姫を長くここに拘束するわけにはいかない。

となると、アガサの足は迷うことなく進むしかなかった。

姫は、時折ぶかぶかの靴を地面に置き去りにして戻る、を何度か繰り返して、アガサのあとをついてくる。

アガサの素足がよほど気になるようで、しきりに詫びの言葉を口にする。

こんなに懺悔されると、まるで自分が神様にでもなったような、不思議な気分になる。

アガサはまんざらでもなく胸の高鳴りを覚え、目的の場所が近付いたので姫の手を取って厳かに命じた。

「目を閉じて」

姫はためらいながらもそのとおりにした。

アガサは安心させるように手を強く握り、一歩、二歩と歩き慣れない姫をゆっくりと誘導した。

冬の庭の一番端、城壁がすぐそばに立ち、用がなければ誰も寄り付かない場所へ。

そこに一本の木が立っていた。

なんの変哲もない木、だと、アガサの合図で目を開けた姫は思った。

「この木が、なにか……？」

がっかりを隠そうとする姫の反応に喜んで、アガサは木の幹をがつんと、足で蹴飛ばした。

途端、ざわついた音ともに、はらはらと一枚の葉が舞い落ちてきた。

まるで雪のように、白い光を発しながら。

「わっ……！」

と、声を発して、それがどんなにはしたないことだと恥じることも忘れてしまったように。

姫は目も口も目一杯開いて、その幻想的な光景に魅入った。

木から落ちる葉とともに、無数の光が生まれてくる。

垂直に線を引き地面に落ちるもの、時折光を放ち点となるもの、様々な形を成すもの、確かに最初は白であったはずなのに、やがて青く染まり、赤く燃え、最後に金色に輝き消えていく。

何千もの光を見送り、やがて辺りが静まりすっかり闇を取り戻し随分経ったあとに、姫は静かに傍らの庭師を見た。

銀色の瞳から、涙が一筋こぼれた。

目を酷使させてしまったようだ。この光を見るのには、それなりの体力が必要になる。

「この木はいったい……？」

「普通の、何の変哲もない木、ですよ」

「でも今確かに……」

姫がなんと形容していいものか悩んでいることに、アガサは満足した。

「何千もの光に見えましたか？」
「はい。様々な形で、様々な色に見えました」
「本当はせいぜい１５０匹ぐらいです」
「ぴき？」

それが数だとも結びつかないように、姫が驚く。
アガサは頷いて、ズボンのポケットから何かを取り出して見せた。
手のひらの上、わずかな土の中に、小さくて長くて白い、うごめくものがいる。
姫は一瞬ぎょっとした表情でそれを見やり、すぐに思い直したのか興味深そうに覗き込んできた。
それを手でつまんでみたときには、さすがにアガサもぎょっとしたが。

「何かの幼虫、ですか？」
「そうですね、正確にいうと、妖精、のほうなんだとオレは思うんですけど」

妖精。
その容姿からはまったく結びつかないそれを、姫は、まるで何よりも尊く愛しいものであるかのようにそっと手のひらで包み込んだ。

「こいつら、ああいうさっきのようなじめじめとした土の中で生まれてくるんですよ」
「まあ。では、さきほどのあなたは、この者たちを掘り出そうとしていたんですね？」
「はい。土をって言うのも嘘ではないのですが。さっきは姫の名前にびびってしまって。すみません」

こんな奇妙なものを手のひらに乗せられるような姫になら嘘は無用だ。
案の定、いいえ、お構いなく。と、姫は笑ってのける。
「別に劣悪な場所を好んで生まれるのはいいんですけどね。こいつら、じゃなくてこの者たちはちゃんと成長するためには充分な日の光を必要とするんです」
「……　まあ。なかなかわがままなのですね」
「はい、そうですね。すぐ死にますし、弱い生き物です」
姫のわがまま、という言い方は、なかなか当たっているなとアガサは感心した。
こいつら、じゃなくてこの者たちを育てるために、どれだけのお金と時間と愛情を傾けているか。
目を輝かせて次の説明を待っている姫に、自分の貧窮ぶりまでは語らないでもいいよなと思う。
「弱い生き物ですがきちんと成長を遂げると、さっきのような光を放つようになります」
「本当ですか？」
眉を寄せ、とても不可解そうにする姫。子供のような正直さに苦笑してしまう。
今の見た目からは想像できないのも無理はない。
これから一ヵ月ほど、毎日専用のエサと日光を与えてやると、今の幼虫のような姿から、蝶のような姿に変わる。そうしたら、この木に移してやる。
それからさらに一ヵ月ほどすると、突然姿が見えなくなる。
どこかに飛んでいってしまった可能性も大いにある、が。
普通の、何の変哲もない木だったはずの木が、さっきのような光

を放つようになることだけが真実。
アガサは庭師として、その事象について色々と想像することはできるが、こいつらは妖精なんだ、という結論が一番気に入っていた。

「このような美しい生き物がいるのですね」

うっとりと呟く姫。子供のような純真さで、笑ったり驚いたり、きっと悲しんだりするんだろう。
最後まで美しい夢を見させてあげたい、そうすべきだと思った。
姫の手から、妖精を取り戻しながら、アガサは頭上の空を仰いだ。
あんなに克明だった月の線がぼやけて、もうすぐ新しい主役と交代しようとしている。

城から一歩外へと踏み出した銀月の姫君に、冬の庭師として、何か見せてあげたいと思った。
自分に問いかけ、アガサは再びその場に片膝をつく。
今度は鞘を地面にぶつけてしまわないように気をつけて。

「姫に喜んでいただけて光栄です。こいつら……　この者たちの、最期の命の光だから」

大きく目が見開かれた。
言葉の意味をすぐに悟って、悲しい顔をする。
外見だけでなく中身も優れた姫だった。
妖精の命は、たとえ永らえたとしても儚く、弱く。だからこそ、愛しく。
寿命が近づくと、一度だけまばゆい光を放つ。それがこの妖精が持つ特性だった。

「庭師は、命を弄ぶのが仕事なんですよ」

アガサが曖昧に笑ってみせると、姫も同じように、曖昧に笑った。
高い城壁を越え、東から太陽の光が差し込んできている。
さあ、もう夢の世界から目を覚まして。
月は消えて、太陽が現れる。
夜から、朝へと空が変わった。

3．友人の見習い兵士

ああ、そっか。
昨日の特別警戒令は、外から城に入ってこさせないためではなくて。
城から外へ出さないため、だったんだ。

アガサはギイとベッドが軋む音とともに、重たい身体を起こした。
少し開いた戸の隙間から、力強い光が差し込んできている。
どうやら朝、より、昼のほうに近い時間帯らしい。
昨日は横になるのが遅くなったからしょうがないか、と言い訳を思う。
ベッドの下、足の裏で床の感触を確かめて、はっとした。
アガサは神妙な気持ちでベッドの上に正座して、床を凝視する。

靴は、なかった。

ぼろぼろでぶかぶかの靴。
今ごろ、それは、姫、そして友人の見習い兵士の上着ともに城の中にあるはずだ。
いや、もう今ごろはごみ箱の中だろうが。
……　そんな寂しい想像の信憑性は高くて、アガサは後でこっそりごみ捨て場をあさってみようと思った。

「夢、じゃなかったんだなぁ」

ぼさぼさになった後ろ髪を掻きながら、声に出すと、ますます現実のものとして濃さを増すような気がした。
夜の空気をしっかりと吸い込んだ我が家の床はしっかり冷たくて、

足の裏から染みてくる。
アガサは我慢して、窓の、いらなくなった服などの布を縫い合わせて作ったカーテンを開けた。
確認したところ、もう太陽はかなり高い位置にある。

（しまった）

アガサは慌てて、近くにあった棚をずるずると引きずり寄せた。透明張りにした箱が乗っている。
箱の底にはアガサ特性の栄養満点の土が、中指を付け根まで埋まる深さで敷き詰めてある。
昨日採取した新顔たちも今はこの中で眠っているはずだ。
しばらくは、固形エサは与えずに、十分に日光を当ててやる。
上手くいけば、一週間ほどで自分で動けるようになるので、そうしたら、また環境を変える。
アガサは棚に頬杖をついて、土をじいっと見つめた。正確に言えば、土の中にいる妖精たちを。

「ノリ、よーく育てよー」
「のり？」

いや、それは白いご飯に乗っけて食べるとおいしいやつで。
アガサは驚いて、後ろを振り返った。
アガサの生活用品がすべて集約されている机の隅、かろうじてご飯を食べるスペースとして確保してあるところで椅子に座って突っ伏している人影が。
盗人の可能性をちらりとでも疑えるほど、アガサの家に高価な物はなかった。

「いつからいたんだ？」

アガサの声に反応して、人影がむくりと起き上がる。
せっかく、太陽の光を独占するように輝く金色の髪と、それに似合うだけの華やかな顔立ちをしているのに。
ぶわっと大口を上げてあくびをして、すべてを台無しにした。
おそらく、昨日はほとんど眠っていないのだろう。

「お前が帰ってきたころにはちゃんといたんだけどね。なんつーか、俺は正当な持ち主を差し置いてベッドを借りるわけにはいくめえ、せめて一言許可をもらってから、と思って、ここで椅子に座って、帰りを待っておったわけよ。眠いのをこらえて」

友人の見習い兵士は、もう一度あくびをして、今度は目をこすった。
少し意識がはっきりしてきたようだ。

「したらお前は、帰ってきた途端に、その変てこな虫の世話を始めてだな。やり終わったらすとんとベッドで寝ちまったんだよ。俺は結局、おかえりさえも言わせてもらえなかったわけ」
「それは……　ごめんなさい」
「うん。お前もう少し、人間にも関心を持ったほうがいいと思うよ」

友人の忠告をありがたく受け止めて、アガサはお詫びにお茶をいれることにした。
幸い、副業のおかげで茶葉の種類は豊富だ。寝不足にききそうなものを選んでやる。

「で、のりってなに？」
「のりじゃなくて、ノリ」
「のりじゃなくて、ノリってなに？」

「こいつら、じゃなくて、この者たちのこと」

お茶のカップを手渡しながら、アガサは窓辺の透明箱を指す。

友人は露骨に嫌な顔をした。虫の類が苦手なのだ。

「外見も変てこなのに、名前まで変てこにするのか？」

「変てこって言うな。せっかくとある人から名前をもらったんだから」

カップの中身がおどろおどろしい緑色だったので、友人は引き続き嫌な顔。

疑わしさで満面にしながら一口飲んで、ぱっと顔を輝かせた。どうやらお気に召したらしい。

「変てこな名前とは言え、お前の口から俺以外の人間の名前が出るのは珍しいね。ちょっと妬けるな」

「……　チタってのも、変てこさでは負けてないと思うんだけど」

「アガサもね」

友人の見習い兵士ことチタは、腰に手を当て、ぐぐっと一気にカップの中身を飲み干した。

「ノリ、ノリねえ……」

ぶつぶつと繰り返しながら、想像上のあごひげを指で弄んでいる。

そういえばあんな高いところに太陽があるのに、何、のんびりしてんだろう。

窓の向こう側を覗いてみる。青い空に白い雲、いい天気だった。

今日は休みなのだろうか。

と、推理していたら、今から仕事に行く、とのことで。

見習い兵士のくせして重役出勤なんてしていいのか、という言葉はごくりと飲み込んだ。
そのまま身に染み込んでいく。

「じゃ、俺はもう行くわ」

と、チタが立ち上がる。ぐん、と一伸びして、長身を屈めた。
相変わらず、城の雰囲気にはちっとも合わない恰好をしている。
布のあちこちに穴が開いているのは流行であって、資金不足ではなく。街中を歩いても浮かないため、なのだろう。
着る服を選ばなくてすむというのは、羨ましい性質だ。
身長はわずかに負けるが、ほぼ体格も、給料も一緒なはずなのにどうしてこう差が生まれるのかな。
姿勢がいいっていうのもあるな、と横目で見送りながらアガサは思う。
職業の違いもあるのかもしれない。
アガサが毎日、背を丸めて土いじりをしているのに対して、チタは毎日背を伸ばして行進の訓練をしているのだから。

「あ、そうだ、チタの上着……」
「ん？」
「ごめん、制服の上着、昨日汚しちゃったんだ。だから弁償で許してもらってもいい？」
「弁償って……　そんな殊勝な単語が、お前の口から出てくるほうがびっくりだよ」

両手を広げて、肩をすくめる。こういう大袈裟な動きも友人がやると様になるから不思議だ。
確かに、金勘定に対しては少し神経質になる自覚はあるけれど。
そんなに、普段からがつがつして見えるだろうか。

少しだけ、日頃の自分を省みる。

「いいよ、制服ぐらい、いくらでも支給してもらえるし」
「でも……」
「いいって。お前のおかげで、あんな大層な警戒の中、外に出られたんだから」

昨日の夜は楽しかったしね。
片目をつぶってみせた友人の笑顔が、開かれた戸から入り込んできた太陽光にかぶる。眩しくて、アガサは目を細めた。
なんでこんなに、違うんだろう。みんな、同じ種から育ったはずなのに。

冬の庭師と春の庭師の違いはわかりやすい。それは、庭を見れば、すぐにわかることだからだ。
でも、育った場所があまりにもかけ離れていると、月のように遠く感じられるだけで。
手を伸ばしても届かない、たとえ触れることができたとしても、夢のように不確かで。
月夜の露を浴びた花に触れたような、冷たさだけを残して。

「アガサ」

変てこな名前を、変てこな名前の友人の見習い兵士が呼んだ。
ああそっか、ちゃんと、みんな同じところもある。
もうすっかり見慣れた、友人の端正な顔を見ながら、思い出す。

「また、あとでな」
「？　ああ」

たいして深く考えもせず、アガサはこくりと頷いた。
家の戸が完全に閉じられるまで見送って、アガサも本来の仕事に出なければ、と思った。
少し遅くなったけれど、まずは靴の調達から、いつもの一日を始めよう。
そして、いつものように終わろう。そう、思っていた。

再び家の戸が開かれたのは、太陽がとっぷりと沈み、空に星と月が輝き始めたころだった。
昨夜よりもびりりとした空気は若干緩み、柔らかなヴェールにすっぽりと覆われたような今夜だった。
アガサの家の戸を開いたのは、見慣れた友人の、端正な顔ではなかった。
びっしりとあごひげを生やした強面で、比べようもないくらい堂々たる兵士ぶりをした、確か、チタの先輩の先輩の先輩の、……

「主門守備兵隊長のマイヤスクドールと申します」

名前と苗字の切れ目がない名乗りをして、敬礼をした。
ならって、後ろの二人の兵士も同じようにする。さすがに毎日訓練しているだけあって、びしりと決まっている。見習い程度とは二味ぐらい違っていた。
アガサはどうも、と軽く頭を下げて、突然の訪問者に遅ればせながら、手のひらに汗をかいた。
しまった、城の庭で育てた薬草で小金を稼いでいるのがバレたんだろうか。
それとも、庭への手入れ費用を節約して、こっそり貯金してるのがバレたんだろうか。
それとも、昨夜のあれが何か、問題になったんだろうか。
身に覚えがありすぎて困った。

「なんかご用事、ですか？」

それでもいちおうの社交辞令を通す。

たくましいあごひげを揺らしながら、隊長のマイヤなんとかの口が動く。

「冬の庭師のアガサどの、で間違いありませんか？」

「はい、そうです」

「一つのお届けものと、一つ、いや二つほどのご伝言を、お預かりして参りました」

まさか、新手の配達屋だったとは。

さすがに想像を軽々と飛び越えられ、アガサはしばし、その場で固まっていた。

死刑宣告を、なんてにやりと笑って付け足されても、いまだ似合ってしまう状況なので、気を抜くことはできない。

なんとか隊長は立派なあごひげをぐいっと前方に突き出した。後ろの兵士はすぐに読み取り、そそくさと隊長の前に回り込み、片膝をついて、持っていた四角い箱をアガサに差し出した。

恐る恐る手にしたものの、それほどの大きさではなく、重さでもなかった。

お届けもの。今度は、身に覚えがなさすぎて困った。

それでも隊長のあごひげに無言で先を促されて、アガサはおそるおそる箱の蓋を外した。

右足と左足、左右対称に揃えられた一足の靴が、四角い箱の中にきっちりと収まっていた。

アガサは驚いて、思わずマイヤなんとか隊長を見上げた。

そこに先ほどまでの恐ろしい顔はなく、代わりにひげに覆われた口で思い切りのいい笑みを結んだ顔があった。

「冬の庭師のもてなしに深く感謝いたします、一生忘れません。とのご伝言でした」

夢、じゃなかったんだ。

さっき新しく移されたごみ捨て場をあさってみたら、それらしいものは見つからなくて、やっぱり夢だったのかと思ったばかりだったのだけれど。

けれど、こんなはっきりとした形で示されるとは思ってもみなくて、だから。

ありがとうございます、とアガサは、なんとか頭を下げてから、慌てて、そう、伝えてください、と続けた。

承知いたしました。と、力強い声が応じる。

会ってまだほんの少ししか経っていないけれど、この人に任せておけばすべて大丈夫、という気がした。

さすがは多くの命を預かるだけはあるというか、さすがに見習い兵士とは違っていた。冬の庭師と春の庭師の違いと同じものを感じた。

そして、アガサは、名前をしっかり覚えなかったことを後悔した。

（マイヤ、なんと言ったっけこの人の名前は……）

あとで友人に探りを入れようとこそりと思う。主門の守備兵隊長だと言った、役職名だけは忘れないように、と空に繰り返す。

隊長はそんなアガサの内心の葛藤は露ほども気にせずに、さらに豪快に笑み、もう一つ、と太い人差し指を立てた。

「それをはいて、とある場所にお連れするようにとの、ご指示もお預かりしております」

誰から、などとは恐ろしくて口にできるはずもなかった。
さすがに、いくら人間関連に鈍いアガサといっても、この靴から思い浮かぶ人物は、たった一人きり。
けれどそんなことは事実だというだけで、恐ろしくて口にできるはずもなかった。

「アガサ殿。我々とご同行願えますかな？」

どこへ、などとは。
地獄まで、と洒落て答えられても、気の利いた返しもできそうもなかった。
ただ従順に、アガサはこくりと頷いた。

アガサは、冬の庭師と任命を受けた以来、初めて踏み入れた足をまじまじと見つめた。
ちゃんと、歩けているのかいまいち、自信が持てなくて。
服は、いつもの服だった。
アガサは同じようなデザインの服を二着しか持っていないので、一方を洗濯している間にもう一方を着る、という方法を採用していた。いちおう、きれいなほうを選んで着てはみたものの。
マイヤなんとか隊長に先導されながら、高級そうな絨毯の上を歩く。
なんの素材でできているのか、さきほどから、ふわふわとアガサの足の裏を押し上げては、根底から不安げを煽いでくる。
すれ違う人たち（ほとんど城内の召使いばかりだった）が、脇に寄り道を開け、軽く頭を下げる。そして、隊長の後ろにひっついていく庭師を映した目は決まって、真ん丸になっていた。
さすがに鈍いアガサにも、自分がひどく場になじんでいないのが

理解できた。

唯一の救いは、お届けされた一足の靴だけだった。

木と土の中間の色合いをした靴は、なんの素材でできているのか、綿のように軽く、アガサの足に合っていた。アガサにはわからないが、きっとそれなりに高価なものだろう。

おかげで、高級そうな絨毯を汚す心配だけはしなくていい。その事実はかなり、アガサの負担を少なくした。

マイヤなんとか隊長は、大きな扉の前で立ち止まり、厳かな声で入室を宣言した。

どうやらここが目的地らしい。

向こう側から声が応じるのを確認して、扉が真ん中から割れる。

現れたのは、広い部屋だった。これだけでアガサの家よりも広そうだ。

豪華な装飾がほどこされた机やベッド、生活に必要そうな調度品が上品に配置されている。客室、だろうか。

その部屋の真ん中に、一人の人間が立っていた。

よう、と片手を上げて、その人物は太陽のような、晴れやかな笑みを浮かべた。

天上からは、夜空の星を真似ているのだろうか、ガラスを散りばめた照明がぶらさがっている。そのおかげで、夜の室内だというのは忘れてしまうほど明るく、金色の髪は、朝の光に照らし出されたような輝きを今も失っていなかった。

靴のつま先から頭のてっぺんまで見事に全身、白一色の衣装だ。

普通なら気障、と一笑されてしまいそうなものでも、例えば、アガサが着ればたちまち笑いが起こりそうなものでも、彼ならば、たちまちため息が漏れるに違いない。実際、アガサがそうしたように。

重たそうな素材でできた白いマントを華麗に翻して、固まってそ

の場から動けずにいるアガサに近づいてきた。
アガサの後ろに控えていたマイヤなんとか隊長に、ちらりと視線を寄越す。
隊長は深々と頭を下げ、退室していく。背後で扉が閉じられたのがわかった。

「またあとで、って言ったろ？もう忘れてたのか？」
「いや、覚えてたけど。お前がうちに来るもんだとばっかり」
「ああ？　そっか、悪かったな。今日はさすがに仕事サボるわけにはいかなくてさ」
「別にいいけど……」

誰もいなくなった途端、いつものくだけた感じの、アガサの知っている雰囲気に戻った。
アガサはほっとして、頭の混乱を沈める努力をする。
まず、何を言ったらいいんだろう。
思案しているアガサの顔を見て、ぶっと、せっかくの諸々を台無しにする音が響いた。
続けて、広い部屋を飛び越えて、城中に響き渡りそうな笑い声が溢れ出した。
アガサは友人の突然の奇行に眉をひそめ、そっと扉から外に出ようとして捕まった。

「悪い悪い。もう笑わない。約束するから」
「別にいいけど……」

涙目になりながら、ふーっと一つ、息を吐き出す。
もう一度向き合ったときにはもう、いつものくだけた雰囲気さえ飛び越えていた。
アガサはさらに頭を悩ませながら、とりあえず一番最初に浮かん

だ言葉を口にした。

「……　そういえばさっきの、あごひげの隊長さん」

「ん？　ああ、マイヤスグドールのことか？」

「あ、それだ。マイヤスクドール。一回聞いただけじゃ覚えられなくてさ」

忘れないうちに、と空に繰り返す。

そんなアガサを下から上までじろじろと眺めながら、ふーむ、と想像上のあごひげを弄んだ。

そういえばこれは癖だった。友人の。

「さすがにその恰好は難しいかな。靴はともかくとして」

「何のこと？　もしかしてまた何か頼みごとなのか？」

ぽん、と手が打たれた。白い手袋をしているので、実際に音は鳴らなかったが。

「実はそうなんだよ。引き受けてもらえるかい？」

「内容によるよ。いったい今度はなに」

「たいしたことはないよ、昨日のやつよりははるかに簡単さ」

さらに笑みを深くする。いつもの何か企んでいる友人の笑い方に似ていた。

アガサは一瞬、目の前にいるのに見失ったような、妙な感覚を味わった。

「賭けは最後まで見届けないと、だろ？　やっぱり」

賭けとは。

銀月の姫君は誰とも結婚なんてしない、と、そう賭けたことぐらいしか、アガサには身に覚えがなかった。
しかし今夜、婚約の儀がある、とそう本人の口から聞いていた。
だからもう、アガサには勝ち目が残っていなくて。
というか確か、昨日の身代わりの仕事を引き受けたらチャラにすると言ってくれなかったっけ、この目の前の人物は。

「チタ？」

自分と同じように、変てこな名前を呼んでみる。
いつのまにか呼びつけていた召使いに、何かを指示を与えていた彼が振り返った。
白いマントを翻して。金色の髪を輝かせて。
見慣れた端正の顔で、なに、アガサ？　と、変てこな自分の名前を呼び返す。

こんな人間は知らなかった。
そこにいたのは、アガサのよく知る友人の見習い兵士ではなかった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1370ba/

とあるあわれな召使いのお話

2012年1月5日01時46分発行